

市史講座第1回ミニレポート

4月13日(土)第1回の講座が開かれました。

第1部：「宍道湖・中海における魚介類の現状」(講師:島根県立宍道湖自然館コビウス館長 越川敏樹 先生)



越川先生は長い間、中海・宍道湖に生息する生き物や自然の変化を見つめ、研究を重ねてこられました。かつては生き物の宝庫と言われ、多様な生物が生息していたこの水域が、大きく変容し、悪化している現状を憂いながらお話になりました。

宍道湖と中海は日本海の魚が行きかう恵の湖です。春には日本海から大量の魚が遡上し、冬前には順次海へ戻って行く魚たちがいます。それは汽水の宍道湖・中海には、豊富なエサ、穏やかな水辺環境、襲ってくる外敵のなさ等の条件があるからです。

汽水の宍道湖・中海を生息の場とする魚はA～Cの三タイプに分かれます(資料参照)。減少する魚はワカサギなど10種で、大半がBタイプの汽水域で生息する魚です。これは湖底環境の急激な悪化によるもので、夏場の貧酸素水塊の広がりや、海底の生き物たち(二枚貝・

ゴカイ類等、藻類)の減少による餌生物の激減が原因とされています。海底の掃除人がいなくなり、ヘドロの堆積した湖底が現出したのです。嵐や台風などで上の水は流れても、底の水が上昇すると魚は呼吸困難になり、魚の大量死などが発生します。去年は2万匹余の魚の大量死があったのです。

このような現状を回復し、生き物を復活させ、魚を戻すには長い年月がかかります。持続可能な生態系を作るには、科学的方法、下水道整備、人間のモラルと環境意識の高まりなどの努力が必要だと話されました。早くかつての恵の汽水域に還って欲しいものです。

第2部：『土工記』にみる河川の維持管理と藩政改革（講師：甲南大学文学部教授 東谷智 先生）

東谷先生は昨年刊行の『松江市史 史料編5 近世Ⅰ』に所載の「土工記」について、従来の技術書としての評価に加え、藩財政や藩政改革に関わる史料として、新たな視点で下記のようにお話をされました。

「土工記」は宝暦9年(1759)に普請奉行富永庄助が著した職務マニュアルです。全5冊からなり、うち2冊は河川の維持管理に必要な基本的情報や土木技術に関する情報が記され、3冊は具体的な川図入りで普請奉行の管轄を示す台帳にもなっています。

富永は勘定奉行なども兼任し、財政・土木のトップとして藩政に関わっていました。「土工記」が書かれた時期は藩政改革のまっただ中で、この時期の公共事業のあり方を色濃く

反映し、この後「土工記」は改革の実施業況により度々改訂が行われました。問題点を再検討し、改革と公共事業の実施にどう対応していったのかを理解することができる職務マニュアルとなっています。

また、このような地方行政に関わる職務マニュアルは「地方(ぢかた)書」といわれ、江戸時代の中後期に全国的に藩の中下級の実務官僚により作成され、藩政改革と連動することも多く、行政機構の成熟のあらわれであると話されました。

